8　虎図蒔絵印籠　山本光利　一点

江戸時代（十九世紀）
木製漆塗、蒔絵　八・二×五・七×二・九

長方形で蓋と四段重ねに造られた印籠。表全体を金地に仕立て、高蒔絵と研出蒔絵や付描の技法で図様を表し、松の大樹の下に座り彼方の一点を見据える虎と、そのかたわらにはやや小さめの虎がせせらぎの水を呑む姿が描かれている。水呑虎の図様は、南禅寺小方丈の虎の間や金比羅宮表書院の円山応挙による襖絵などに見られ、近世には虎の画題として好まれたことが知られる。京都の蒔絵師、山本光利（一八三九～一九〇八）による作品で、底裏に蒔絵で「光利」、朱漆で朱文方印風に「山本」と銘がある。山本家は代々、利兵衛の名で蒔絵を営み、宮中の御道具製作にも携わり、光利はその五代目にあたる。この印籠は孝明天皇（一八三一～六六）の御遺品として静寛院（一八四六～七七）が引き継がれ、静寛院薨去の後に宮内省へ納められた品である。瑪瑙製の桃形の根付と、やはり瑪瑙製の緒締をともなっており、紐ともに、誂えられた当初の姿を伝えていると考えられる。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

虎・獅子・ライオン
―日本美術に見る勇猛美のイメージ
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 51

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年七月十七日発行

© 2010,The Museum of the Imperial Collections